

現在善知鳥

シテ 獵師

ワキ 卒都浜領主

トモ 従者

所 陸奥卒都浜

ワキ詞

「加様に候者は。みちのくそとの浜の領主何某にて候。扱も我毎年此所にて鷹狩し心を慰み候。当年も又狩を催す処に。物数不足にて思ひの儘ならず候。あまり本意なく候へば。出てからばやと存候。箸鷹の峙定めぬ松島や。く。小島の蜃の塩衣。袖の渡りに波寄て。蘆の村立音たかき。風にや鳥の噪ぐらん。く。」

ワキ詞

「いかに誰か有。」

トモ

「御前に候。」

ワキ

「同勢の内に声高く聞え候ば。若能鳥取て有か聞候へ。」

トモ

「畏て候。シカぐ」

トモ

「承候へば。吉澤殿より上られ候御秘蔵の御鷹をそらし申たると申候。」

ワキ

「扱鷹匠共は何としたるぞ。」

トモ

「向ひの山越に鈴の音聞え候間大勢参候が。今に居

上候共申来らず候。

ワキ「言語道断。いつに替り当年は。鷹狩思ひの儘ならず候に。今日は又秘蔵の鷹を失ひ。何とすべき共わきまへず候。かく長居してせんなし。はや歸らふずるにて有ぞ。鷹の事をば随分申付候へ。

トモ「畏て候。御立腹御尤にて候。今日は御慰御座なく候間。此山陰を向へ御越なされ。沢伝ひに御歸。景をも御覧有て然べう候。

ワキ「さらば向へ渡らふずるにて候。

シテ、一声「面白やそとの浜成呼子鳥。声にやさそふ心哉。

サシ「浅ましやなす事なくて徒に。殺生を経営。頭には霜を戴き。四海の波身に打よれども。さらに後世を弁ず。何方の山此方の沢に。邪見の杖に簑笠。科なき鳥を追立く。流し網さし縄に。懸れる鳥の数々も。来世の責の恐ろしさよ。遁るまじきは報ひかな。

詞「よしなき事を思ひて候。鳥をおゝふずるにて候。

又是へ人の余多見えて候。喃喃旁々は何方へ御通り候ぞ。

ワキ「是は年々向ひの山を鷹狩する者なり。けふは秘蔵の鷹を失ひ。心よからず歸る者也。扱汝は如何成ものぞ。

シテ「是は此そとの浜の猟師にて候が。若年より殺生を好み。鳥取世を渡る者にて候。

ワキ「扱は幸成事なり。汝が殺生の手立を見せ候へ。

シテ「さらば鳥取つて御目にかけ候べし。去ながら。

カゝル「頭に雪の積るまで。かゝるしわざは愧しや。

ワキ「あら愚や老とても。今の楽しみ有なれば。来世も何か苦しみあらん。

シテ「さて出立し我が姿。簑は解脱の衣にて。

ワキ「柱杖を表す竹の杖。

シテ「笠は八葉蓮花なれば。

ワキ 「濁りにしまぬ。

シテ 「水鳥を。

同 「追廻しくて。隙なく鳥を取時は。罪も酬ひも後の世も。忘れ果て面白や。老のおもひ出成らん。未来はとにもかくにも。

クセ 「先春は長閑にて。鳴音妙成鶯の。声に雪消し跡にやぞだつ村鳥。夏の空は一入唯声ゆかし時鳥。心有人々の。うちぞ床敷そとの浜。外面の雨濡々し。

早乙女の帰るさに。笛やたゝくはくひなか。

シテ 「秋は元来雁金の。

同 「雲井に渡れる空もあり。又水に宿るは。おしかもめさぎすら。鴨立沢は余所にだに。ありとは聞ど所がら。名取の川やなこそその関。冬川に成までも。千鳥やよるらん。いざいざ取りて参らせん。

ワキ詞 「近比面白き者に参逢て候もの哉。急いで鳥を取候へ。

シテ、カル

「あれく御覧候へや。おもはぬかたに集る鳥の。跡をしたひて能みれば。

同

「はかなや此鳥の。く。木々の梢に波の浮すかけ。又は平砂に子を生かくせる。あかたの鳥の。うとふと呼ばれて答ふるぞや。

シテ

「うとふ。（カケリ）

同

「簑笠杖を押取持て。く。爰やかしこの草村深山。木々の梢に巢をくふ鳥ならば。げに松島に多かる

らん。

シテ

「是々み給へ人々よ。

同

「是々み給へ人々よ。老の振舞はづかしながら。稀人に慰みの殺生の有様。是までなれや。御暇申と立帰れば。狩人名残を惜み給ひ。見送り帰らせ給ひければ。

シテ

「我は其時去にても。く。

同

「今日の殺生面白や。身にも応ぜぬ老のわざながら。

若年の比よりかく殺生の罪は怖しや。然りとはいへども。一日の栄花ぞ老のおもひ出。けふの狩場を今陸奥の。けふの細布胸逢がたき。簑笠着てこそ帰りけれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂 著
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会 編